

野守は見ずや その後

—天智と天武と額田王—

吉田 賢右

だいぶ前の私の「顧問室の窓」に、万葉集の額田王と大海人皇子の相聞歌のやりとりに、古代日本の双系的社會のなごりを見る記事を書いた(2021年7月1日)。その後、この歌がいかなる状況で詠まれたのか、考えることがあり、以下、前稿の続編としたい。

額田王は大海人皇子(天智の弟、後の天武天皇)の妻で二人の間には子供(十市)皇女、後に天智天皇の息子の大友皇子の妻となる)もできていた。しかし、今は天智天皇の妻となっていた(注1)。

668年、琵琶湖西岸の近江大津宮に遷都して即位したばかりの天智天皇が5月5日、琵琶湖東岸の蒲生野で縦獵(葦草や鹿の袋角(薬になる)などを採集する野遊び)を催した。宮廷の皇族群臣がそろつて参加したという。その折の、額田王と大海人皇子の歌のやり取り。

あかねさす紫野行き 標野行き

野守は見ずや君が袖振る

紫草のにおえる妹を憎くあらば

人妻ゆえに我恋ひめやも

そうだろうか。

大岡信さんは、そのとき、天智天皇はどんな反応をしたのか、考えていないようだ。天智は拍手喝采しただろうか。なみいる貴族王族たちは、天智のいる前で、この歌を聞いて笑いざわめくことができただろうか。だいいち、額田王と大海人皇子はこの歌を、天智と群臣の前で唱和しただろうか。

女性始動でこんな歌が交換できたのも、女性が社会的にも個性においても独立した人格で活動できた古代の伝統が男性優位に推移しつつも底流としてまだ生きていたからだろう、と私は述べた。

とは言え、この歌については、そのあまりの大胆さに、後世の文人・評論家はこの歌が詠まれた状況について、

説明に困ったようで、あえて触れないか、あるいは、倫理と政治が未分化の時代のことだとか、凝った解釈をする。その中で、詩人・評論家の大岡信さんの解釈は明快であり、通説のようになつてゐるらしい。大岡さんは、この縦獵の夜は盛んな宴が催されただろう、と考える。そして、次のように述べる(注2)。

これは衆人環視の場で唱和された恋の歌でした。立ち入つて考えてみれば、そのような心浮き立つ宴の場だったからこそ、歌の主題が秘密めいた恋の歌であることが重要だったのです。人々はそのての歌を聞くことをとりわけ好むという点では、古代も現代も変わりません。:額田王と大海人皇子の場合は、この条件が最高に備わっていました。子までなした元愛人同士でありながら、今、女は男の兄の愛人になつてゐるのです。そのような二人が、とうに若々しい恋情の時代が過ぎ去つたはずの年齢になつても、なおこんなきわどい恋歌を交換しているということは、並み居る人々にとつてなかなか刺激的なことだつたでしょう。それが大っぴらにおこなわれたことによつて宴席の陽気な空気はいやがうえにも盛り上がつたに違ひありません。人々は拍手喝采したでしよう。

私は、この歌は一人の間の私的な贈答歌で、少なくとも、天智存命中は公開されなかつた、と考える。公開されたのは、天武の天下になつてから、あるいは、世代を経て天智天武の相克が昔の歴史的記憶になつた80年後、(天武系の)聖武天皇の時代に万葉集に回収されたのかもしれない。

だいたい、忍ぶ恋の歌の応答は他にもたくさんあるが、当然、それは即時的に公開されたわけではなく、歌集に採録されて周囲の目に触れるのは障りのなくなった後だろう。ましてや、以下に述べるように、当時の天智と大海人皇子の緊張した関係を考えれば、天智と群臣の前で唱和するなど、とてもありえない。

当時、皇族の間では、政略的な近親の婚姻が多かつたが、天智も女性を政略的にあるいは欲望にしたがって扱つた。

天智は、自分の妻である 鏡王女かがみのおうきみ（額田王の姉ひめ？）を、忠臣の中臣鎌足に与えていた。（ご褒美）自分が滅ぼした 古人ふるひと 大兄おおに 皇子の娘である倭姫王しづひめを皇后としている。（魅力？）

自分の娘4人（一）を次々と大海人に妻として与えている。（額田王との交換？）

額田王は、もともと大海人の妻だったが、天智は才媛の彼女を欲して、自分の妻としてしまつた。この事件は朝廷の人口に上つたらしく、天智に次の三山歌がある。

香久山は 畏傍うねびを愛しと耳梨おと相争いき
神代みつせみより かくなるらし 古いにしえも 然しかなれこそ
現身うつせみも 妻を争うらしき

古代伝承を引きながら直截で悪びれず、だからどうした、という居直りの気配もある歌である。

これに対して、額田王と大海人のデュエットは、妻争いの本当の勝者は私たちですよ、とうそりと微笑みを交わしながら確認する（注3）。女の方からの媚態を含んだ呼びかけに、男の方はさらに大胆に、人妻だろうとかまうものか、と答える。これは二人の間の交歎であり、公開するようなものではないだろう。公開すれば、天智に二重の苦痛（妻の背信、それが公衆に知れわたり笑いものになること）を与えることになる。天智はその恥辱に地団太ふむだろう。

それがどれほど危険なことか、次に述べるような、中大兄の邪魔者排除の謀殺を、長年にわたり見てきた熟年の二人にはよくわかつていたに違いない（注4）。

645年、中大兄皇子（天智）は、舒明天皇（皇極女帝の夫）の皇子であり中大兄の異母キヨウダイ（兄）

にあたる古人大兄皇子を謀殺している。皇極退位のあと、古人大兄は次の皇位につくことを勧められたが、それを断り、出家して吉野に引退した。代わりに輕皇子（皇極の弟）が皇位についた（孝徳天皇）。3か月後、吉備笠垂なる者が「古人大兄が謀反を企てる」と密告し、中大兄が攻め殺した。

658年、今度は、中大兄皇子は、孝徳天皇（皇極女帝の弟）の皇子である有間皇子を謀略により謀反の罪に陥れて捕らえ絞首刑にしている。有間皇子は中大兄のいとこであり、皇位継承の有力候補であった。齊明（＝皇極）女帝が紀伊白浜温泉に保養に出ていた時に、蘇我赤兄（後に左大臣に出世）が有間皇子に謀反をそそのかし、蘇我赤兄は、そのまま中大兄に密告した。（注5）。

しかも、蒲生野の縦獵が行われたのは、天智の後の皇位継承（それは3年後に迫つていた）をめぐつて緊張が高まりつつあつた時期だった。大海人は、中臣鎌足とともに長らく中大兄＝天智政権の中枢にて、その後継者にふさわしい政治的経験と力量は天智をはじめ、群臣の認めるところだつたろう。しかし、天智は、成長しつつあるわが子、大友皇子（当時21歳）を後継に望むようになった。そうすると、大海人が邪魔になる。なんとか彼を排除する口実あるいは契機を考えていた時期だろう。そんな情勢を大海人が知らないわけはない。

実際に何が起きたか。

671年、重い病に伏した天智は病床に大海人を呼び、皇位を後継するよう頼んだ（古人大兄の場合とそつくり）。こつそりと大海人に天智の謀（はかりごと）を警告する者もいて、天智の謀略を知る大海人は皇位継承を固く断り、即刻剃髪し出家、早々に今や危険となつた近江を逃れ妻子と従者とともに吉野に引いた（注6）。

天智崩御の後、近江朝では吉野討伐の準備をしてい、との知らせがあり、大海人皇子は飛鳥を出て兵を整え、武力で近江朝廷と対決、大友皇子の勢力を撃破、大友皇子（24歳）は近江で自殺した（672年、壬申の乱）。

近江の陣営では、指揮の混乱、用兵の遅滞、軍の内

訂、寝返り、などあり、それが敗因となつた。天智の負の遺産、すなわち、朝鮮出兵の失敗（注7）、強引な近江宮遷都（注8）、あくどい謀殺、大友後継の無理押し（注9）、などが群臣豪族の求心力を削いでいたのだろう。

673年、大海人は飛鳥淨御原にて即位して天武天皇となつた。以後、重臣を置かず、天皇親政を行う。

しかし、天智とちがつて、注意深く世論を見ながら政事を行った。特に、皇位継承にからんだ謀殺や血なまぐさい争いの悲劇を避けようとした。

679年、天武は6人の皇子を吉野に伴い、お互に決して継承争いを起さぬように、一人ひとりを抱きしめて誓いをたてさせた（吉野盟約）。

しかし、686年、天武が崩御するやいなや、天武の妻であるウノノサララ（後の持統女帝）は、息子の草壁皇子（25歳）を立てるために大津皇子（24歳）を謀殺した（注10）。彼女は天智の娘であり、天智のやり方を踏襲したのである。草壁と大津は才媛の石川郎女を争つていた。天智・天武・額田王の関係とそつくり。

追記

そもそも、蒲生野の縦獵の夜、宴が催されたのだろうか。蒲生野（今の近江八幡あたり）は近江大津宮から約40キロの距離にある。日本書紀には文武百官こと「」とく参加とあるから、一行は百名を超していただろう。女性を伴つての移動であり、往路復路にそれぞれ途中一泊が必要だつたろう。蒲生野で宴会があつたとすれば、その食料飲料の運搬や調理も必要となる。なかなかの大イベントである。

日本書紀はこのころの天智の事績を細かに記す。宴会についても、

668年1月7日、群臣を召して内裏で饗應した。

同年7月、蝦夷を饗應した。

同じく7月、舎人らに命じてさまざまな場所で宴をした。

といちいち記録している。しかし、同年5月5日の縦獵の折に饗應があつた、とは記されていない。もし、盛大な宴会が開かれたならば、その記述があつていのではないか。

669年5月5日には、大津のすぐ近くの山科に皇

族群臣をつれて縦獵をしている。このときについても宴会の記録はない。それで、5月5日の行事にはたとえ宴会があつても記録しないのか、と思うかもしれないが、

671年の5月5日には、天智は西の小殿に出て、田舞をご覧になり、皇太子や群臣と宴を持った

とある。

結局、668年5月5日の縦獵の時にも宴会があれば記録されるはずだ、と考えられる。

その日、宴はなかつた、という可能性が大きい。

付け加えて言えば、蒲生野の縦獵は単なる遊興のピクニックではないだろう。というのは日本書紀には

669年、男女700人を蒲生野に移住させた

670年2月、天智は蒲生郡の日野に出向き、宮を

造営すべき地をご覧になつた

という記事があるからである。天智は蒲生に別宮建設あるいは近江宮からの遷宮を企画していた。すると、668年の縦獵も、群臣たちに新宮建設の候補地を紹介し下見をさせる政治的な意図があつたのではないか。

終わりに

この稿は、私の書棚にある以下の本を参考にした。

岩波書店「日本古典文学大系 万葉集一、二」、岩波新書「万葉秀歌 上巻」齊藤茂吉、講談社「私の万葉集一」大岡信、ちくま新書「女帝の古代王権史」義江明子、東大出版会「万葉私記一、二」西郷信綱。「日本書紀」はネット検索で参照した。

万葉集の研究の歴史は古く、二人の贈答歌についても、今までに非常に多くの評釈がある。すべてを参考照したわけではないが、その多くは、文化的、文学的解釈あるいは想像であるようだ。私は、できるかぎり科学的に、つまり、その時代に生起した諸事象を列挙し、その中で人々がどう行動したか、を考えた。

注1 妻といつても天智には9人、天武には10人のキサキ（皇后、妃、嬪）がいたという。ただし、このころは夫婦別居の妻問婚で、男が複数の女性のもとに通うこともあれば、女も複数の男を通わせることもできた。「女帝の古代王権史」（義江明子）

注3 額田王は、実は、中大兄も愛していたのであり、
大海人が恋の勝利者とは言えない、のかもしない。
額田王が中大兄を思つて作った歌、というのがあるか
らである。

君待つと 我が恋居れば 我が宿の

すだれ動かし 秋の風吹く

ただこの歌は額田王の真作かどうか、疑いがある、と
大岡信さんは言う。その根拠として、万葉初期の歌
にしてはあまりに優美纖細であること、すだれ、秋
風、といった万葉後期から平安朝にかけて盛んに詠
まれる小道具が早くもつかわれていてこと、をあげ
る。私も、柄が大きくて積極的な額田王の作風とす
いぶん違つてゐる感じじる。

さらに、中国の「清商曲辭・呉声歌」という詩集に酷
似した内容の詩があり、この歌はその影響で詠まれ
た可能性が指摘されているという（日本古典文学全
集 小学館）。私が調べてみると、この詩集に想を得
て李白は有名な「長安一片の月…」を作つた。李白
(701-762年)は額田王(690年ころ没)よりも
半世紀あとの人である。もし、李白の作品とともに
この詩集を見るチャンスはなかつた。

万葉集は750年ころ、李白をはじめ大陸の文化に
傾倒していた大伴一族が編集した。大岡信さんは、
彼女のこの歌が大伴一族の歌を多く収録する万葉
集巻四にまぎれこんだように挿入されていることも
考え、大伴一族の誰かが創作したのかもしれない、
と想像する。

注4 もともと、中大兄皇子は、果斷といえば聞こ
えはいいが、武力を持つて事を決する君主だったのでは
はないか（古代文学研究者の西郷信綱さんは「彼は
智謀にとんだ残忍な実行家」と言つ）。

治世中にはほとんど武力行使の無かつた天武天皇と対
照的である。

645年、中大兄皇子は中臣鎌足、石川麻呂らと謀
つて、母である皇極女帝の目の前でみずからも長槍
をふるつて蘇我入鹿を殺し蘇我本家を滅ぼした。
(乙巳の変)

649年、中大兄皇子は、今度は乙巳の変の同志で
ある石川麻呂を謀反の誣告により殺害した。
658年、阿倍比羅夫に兵を与え、東北部の蝦夷を
攻めさせた。

663年、大和朝廷は朝鮮半島に大軍を出兵した。
この頃、遣唐使がたびたび(653年、654年、65
9年)派遣されて平和的な交流があり、唐と事を構
えるかどうか、和戦をめぐつて大和朝廷の中でも議
論があつたと考えられる。その時、出兵を決断し、高
齢の齊明女帝(筑紫に着くと間もなく崩御)や若い
大海人皇子を引き連れて筑紫に宮を移して、全軍
の指揮をとつたのは中大兄だつた。しかし、倭軍は唐・
新羅連合軍に白村江で大敗した。敗北の後、中大兄
は唐と信義を回復する方針に転換し、669年にま
た遣唐使を送つてゐる。

注5 中大兄の取り調べに、有間皇子は「天與赤兄
知。吾全不知」(天と赤兄が知つてゐる。私は何も知
らぬ)と答えたといふ。「天」とは中大兄のことだらう
か。享年19歳。紀伊の刑場に引き立てられていく
ときには、うたつた辞世の歌が残る。

磐代^{いわしろ}の浜松が枝を 引き結び

ま幸くあらば また還り見む

注6 大海皇子が12月の冷たい雨雪の降る中、妻
子とわずかな従者とともに吉野に下るときの歌
　　み吉野の みみがの嶺に 時なくぞ 雪は降りけ
　　る 間なくぞ 雨は降りける その雪の 時なきが
　　ごと その雨の 間なきがごと くまもおちず 思
　　いつづぞ來し その山道を

蓑をつけて、雨と雪に打たれて、くねる山道を、馬は
重く歩く、その一歩一歩ごとに、自分たちの運命を、
今後の政治軍事を、考え、考えていた、という情景
だろう。

注7 中臣鎌足は、天智崩御の2年前に病没してい
るが、死に臨んで、生きては軍国のためにお役に立て
なかつた(朝鮮出兵の失敗のこと)、と詫びてゐる。天
智には反省なく、逆に、唐新羅の侵入を恐れて瀬戸
内沿岸などに多くの砦を築き、労役にかりだされた
人たちから怨嗟の声があがつてゐる。

注8 近江遷都を風刺する歌謡が巷に流行したという。また、不審火が頻発した。近江宮の建物も天智が病臥している時期に不明火で消失している。

「額田王の近江に下るときに作る歌」

うまざけ 三輪のやま あおによし 奈良の山の
山のまに い隠るまで 道のくま い積るまでに
つぶらにも 見つ行かむを しばしばも
見さけむ山を 心なく 雲の 隠そくべしや
にも、奈良を離れて近江に行きたくない宮廷人の思
いが読み取れる。

注9 当時、帝(みかど)が没すると、群臣が集まり次の帝を選んだ。その際に、まずは、亡くなつた帝の同世代のキサキ(皇后、妃、嬪)、キヨウダイ(兄弟姉妹)が候補となり、その中から、政事の経験を積んだ壯年の者が選ばれた(即位の時の推定年令は、推古 39才、舒明 36才、皇極 49才、孝德 49才、齊明 61才、天智 41才、天武 42才、持統 45才)。

大海人という格好の適任者がいるのにもかかわらず、我が子可愛さの私情により、慣例無視(=群臣無視)の独断で、政事の経験がほとんど皆無の大友皇子(24才)を帝位につけようとした天智の強引さは、群臣の間に深刻な分裂を生んだに違いない。

注10 大津皇子は文武に優れ群臣の支持は厚かつたという。彼は謀反発覚から逮捕のわずかの間に、ひそかに、伊勢神宮おおくのみやに下り、幼い時から一緒に育つた親しい姉(大伯おお伯 皇后、斎宮)を訪ねた。語り明かした次の朝、運命の待つ大和に帰る弟を見送つて万感迫つていつまでも立ちつくす姉の歌。

わが背子を 大和に遣ると さ夜ふけて
あかとき露に 我が立ち濡れし

大津皇子の辞世の歌

ももづたう 盤余いわれの池に 鳴く鴨の

今日のみ見てや 雲隠りなむ

なお、この歌は、後の人がが皇子を悼んで作ったという説があるが、私は、この歌はとても平明で、皇子の文才をすれば処刑前のわずかな時間でも作れると思う。